

# 主要魚種の生態調査（バケメイタの標識放流結果）

（沿岸漁場開発調査）

藤川裕司・田中伸和・若林英人

## 1 研究目的

和江漁協所属の小底1種によるナガレメイタガレイ(バケメイタ)の漁獲量は、9月が最も多い。その主体は1歳魚であり、2歳魚は極めて少ない。その後、10、11月にかけて漁獲量は激減するが、これは1歳魚の漁獲量が減少するためである。翌年9月には、1歳魚新規加入群が漁獲され始めるが、前年同様、1歳魚が主体で2歳魚は極めて少ない。この原因は、1歳魚は秋季以降に小底の漁場以外の海域へ移動する、1歳魚は、9月以降強い漁獲圧に曝され資源量が激減する、秋季以降1歳魚の分布が分散するので漁場が形成されない、のいずれかと考えられる。ここで、<sup>1)</sup>については、1993年から1997年の平均では、11月の漁獲量は9月の漁獲量の約1/5に減少しており、この減少が漁獲圧のみにより実現するとは非現実的である。<sup>2)</sup>については、試験操業の結果より、秋季1歳魚の分散傾向は認められなかった。<sup>1,2)</sup>そこで、<sup>1)</sup>について検討するために標識放流を行った。

## 2 研究方法

1999年5月12日に浜田市沖に平均全長20.2cm、推定年齢2歳の個体75尾、5月17日に多伎町沖に平均全長20cmの個体31尾、5月29日に美保関沖に平均全長19.3cmの個体192尾に、それぞれ標識を装着して放流した。標識は、全長3cmの“シマ”および“通し番号”を記載した黄色チューブタグである（添付資料）。

## 3 研究結果と考察

再捕魚の放流後の経過日数は、1999年3月31日時点で浜田市沖放流群では5～18日、多伎町沖放流群では108日、美保関町沖放流群では1～72日であった。放流後100日以上経過して再捕されたのは、多伎沖で再捕された1尾だけであった。すべての再捕魚は、放流地点の近辺で再捕された。この結果から考えると、島根県沿岸域に分布するナガレメイタガレイは2歳魚の5月から9月にかけては大きな移動を行わないことになる。今後は、小底の漁獲量が減少する、10月から11月に標識放流を行い、秋季から冬季における本種の移動回遊を検討する必要がある。

## 4 文献

- 1) 藤川裕司・田中伸和・沖野 晃：資源管理型漁業推進総合対策事業，平成9年度島根県水産試験場事業報告，112-119（1999）。
- 2) 藤川裕司：主要魚種の生態調査（バケメイタの水深別出現状況），平成10年度島根県水産試験場事業報告，p21(2000)。